

憩室症患者における左側結腸癌の リスクの増加

Increased risk of left sided colon cancer in patients with diverticular disease: *Stefansson T, et al* (Gut 34: 499-502, 1993)

大腸癌と大腸憩室症は、疫学的に同様の特性があることから、共通の原因を持つことが指摘されている。憩室症患者では大腸癌のリスクが増す、という仮説が、スウェーデンのコホート研究で提示された。

1965～1983年までの間に憩室症あるいは憩室炎と診断され、1985年まで経過観察された7,159人について検討した。大腸癌全体について

は、憩室症患者と対象群間の比は、1.2とやや増加していたものの、有意差はなかった。

大腸の部位別に検討すると、右側結腸(上行結腸と横行結腸を含む)癌と直腸癌においてはそれぞれ1.1と0.9で、有意差はなかった。しかし、左側結腸(下行結腸とS状結腸を含む)癌では、憩室症患者と対象群の比は、1.8と高く有意差を認めた。左側結腸癌のリスクの増加は性別、年齢を問わず認められた。また、左側結腸癌は、他の部位の癌とは異なり、診断後長く経過すればするほど増加する傾向がみられた。このことから、憩室症と左側結腸癌が同じ原因で起こるとは言えないが、これら

の間には何らかの関係があることが示唆される。

憩室は、S状結腸に多くみられる。また、ある種のバクテリアは、左側結腸に多く存在し、便中の胆汁を分解して発癌物質を作り出す。この発癌物質が憩室に溜まり、大腸粘膜がこれに長期間曝されることで慢性炎症を生じ、癌化する可能性が考えられる。

著者らは結論として、憩室症の患者に左側結腸癌が多いのは偶然かもしれないが、憩室があることで、悪性疾患が見逃されることのないよう留意すべきと述べている。

(愛知県がんセンター消化器内科

澤木 明 抄)